

## アカデミア メランコリア (第35回) (若手のコラム)

広島大学大学院 統合生命科学研究科 博士課程後期2年  
日本学術振興会 特別研究員(DC1)

矢野 諒子

広島大学統合生命科学研究科の矢野諒子と申します。本ニュースレターの編集長である岩本 洋子准教授とは、同じ研究科所属であり、また研究の交流もあるというつながりで、このコラムの執筆のお話を頂きました。まだまだ若輩者ですが、今回このような機会を頂きましたこと、大変嬉しく思います。私は学部2年次より、小池 一彦教授のもとで、植物プランクトンの生理生態について研究しています。今回は、私自身の研究紹介と、博士課程になってから参加したコロナ禍での国際学会について綴らせていただきたいと思います。



私が海の研究に興味を持ったのは高校生の頃です。ウミガメの研究経験を持つ高校の生物の先生が、授業中に研究生活の話をつづり交えて授業してくださり、それがきっかけとなって海洋生物や海洋生態系に関心を持つようになりました。高校3年生時に広島大学のパンフレットを眺めていたら、“海洋生態系”をキーワードとした小池教授のコラムが目にとまり、受験や研究室争奪戦を経て、現在の研究がスタートしたわけです。

学部生時のテーマは、貧栄養化が問題視されている瀬戸内海で、海洋生態系の基礎生産者である植物プランクトンの栄養状態を調べる手法を確立させようというものでした。栄養塩制限下での光合成応答を調べていく中で、栄養塩制限が植物プランクトンの強光防御機構に影響すること、さらに種によって応答に違いがあることを発見しました。そこで大学院では、近年の環境変化(貧栄養化と強光ストレス)が植物プランクトンの動態や光合成機構にどう影響するのか、というメカニズムにも迫るテーマに発展させました。現場調査における漁業者の方のご協力に加え、実験・解析を行う上で多くの研究者の方にご協力・ご助言を頂くことで、自身の研究を進められていますことに、日々感謝しております。この場を借りて深く御礼申し上げます。

私は前述の今まで行ってきた研究について、積極的に学会で発表することに努めています。しかし、皆様もよくご存じのとおり、2020年度以降、国内外ほとんどすべての学会が中止またはオンライン開催になってしまいました。このような状況においても有難いことに多くの学会に参加する機会をいただき、博士課程では3つの国際会議；Ocean Science Meeting 2022(オンライン開催)、The 19<sup>th</sup> International conference on Harmful Algae(オンライン開催)、Joint Aquatic Sciences Meeting 2022(ハイブリット開催、対面参加)に参加しました。オンライン開催の一番良いところは、移動しなくてよい(移動・滞在費がかからない)、ということだと思います。しかし一方で、他国主催の学会では発表が日本時間の早朝や深夜になることが本当に辛いところでした。ならば昼夜逆転生活をすればいい、ということになるのですが、研究室で普段通り実験が進められる状況ではついつい実験のスケジュールを組んでしまい、自分の発表の時だけなんとか参加するという非常にもったいないことをしていました。皆様はオンラインの国際学会にどう参加されていましたでしょうか。

今年5月によく海外(アメリカ)に渡航して発表することができ、直接会って話す、という研究面でも今まで当たり前だったことの有難みを痛感しました。さらにハイブリット開催だったJASM 2022では、対面参加者も含めた全ての発表者がオンライン上に発表動画をアップするシステムとなっていました。そのため、現地で聴き逃した発表や他の発表と被って聴けなかった講演も自分のペースで視聴でき、さらに発表時間外でもチャットで交流できるという点は、ハイブリット開催ならではの利点であると感じました。今後の国際学会はハイブリットが主流になるのでしょうか。こんなご時世ですが、研究の幅を広げられるよう、視野を大きく持って日々の研究生生活に励んで参りたいと思います。